

# 蓮華草のバガテル

片浜 さかい みつほ

わたしは人生の誇りを奪われました  
たいせつな蜜蜂を失くしたのです

懸命に手を尽くしましたが、駄目でした

そして、お母さん

あなたもわたしの災難を救えませんでした。

ギリシヤ詩文抄・アリストイオの嘆きより

新幹線が東京駅に到着すると、わたしはすぐ電車を乗  
換え秋葉原を目指した。都会に不馴れな積りはないが、  
どうも脚が地に着いていない感触だ。何しろ娘の千幸と  
会って話をするのは初めてのことなのだ。

私には、生まれたばかりの千幸を抱いた記憶も、産声  
に耳を傾けた経験も全くない。唯ひとつ、病室かどこ  
か、身動き出来ない私が横たわり、壁の向うから私の担  
当医と思われる人の声が二言三言聞こえる、それだけ

だ。

「だいたいぶ壊疽えそがすすんでいきます。」

家族の話ではそれから四ヶ月、私の昏睡は続いたのだという。

私が生死を彷徨い、予断を許さぬ身であった頃、千幸は栃木県に住む夫婦の子となっていた。尤もこのことを私が知るのは、最近になってのことである。

意識は恢復したものの治癒とは程遠い状態で、退院後も自宅から出ることなく、姉に食事を届けて貰うだけの毎日を繰返していた。暦だけは付けておいたから、この間、三年を経過したと、いまでは判っているが、姉夫婦のいる、故郷の丹波笹山に帰っていたときの記憶もうろ覚えでしかない。

自活出来る旨を姉に伝え、私は静岡でひとり暮らしを始めることとなった。平井坂田漁港からそう遠くない黒仔集落の浦部家は、嘗て私が中学生のとき里親だった家で、建物だけはその儘残っていると知っていたし、何にも煩わされることなく新しい生活するのに分相応と考えたからである。

自らの手を離れていった娘とはいえ、全く意識しなかったといえば嘘になる。千幸の成長する様子は、間接的に知り得ることは出来たが、私はなるべく無関心を装った。決して強がりからばかりではない。千幸を引き

取った夫婦は子どもを持ってなかったからそうしたので。私が必要以上に接近を試みれば当然有難くない存在とみられるだろう。

何より私には、健康を維持し生活の糧をみつけることが課題であった。

十五年以上、時を経た或る日、わたしは意外な宅配小包を受け取った。差出し人は、宇都宮市鑑山こてやま、森富千幸とある。

添書きには、高校生となった千幸が、一年次に演劇部で見た個人的能力が認められ、二年次には地元の映画製作会社から主演女優に抜擢され、その作品、「高根沢物語」のDVDを送る、というのだ。彼女が幼少の頃より乗馬を得意にしているとは聞いてはいたが、美しい草原を疾駆する姿もなかなか恰好のよいものだし、それ以上に感銘を受けたのは、栃木県に、否、現在の日本に、前世紀の英国を髣髴させる風景が残っていたということだ。もしかしたら先端技術の特撮とやらで、実在しない光景をつくりあげたのかも知れない。

そして千幸が演じる主人公・宝積寺桜子が随所にみせる馬の後乗り、つまり馬に後向きに跨って、尻を叩いて駆けさせる技、こんな芸当をやれる少女は栃木県はおろか全国的にも稀有けうということなのだろう。

「一生懸命頑張ってます。応援してくださいね。」

手書きのサインが添えてあったが、これも役者が知名度をあげる戦略のひとつで、私自身を特別視したものではないと、そのときは考えていた。

だが程なくして、わたしは千幸と手紙や携帯電話のメールでやりとりを頻繁にするようになり、長電話で話し込むこともふえるようになった。現代っ子らしい天真爛漫さ、そして北関東訛り丸出しで喋る素朴な性格、私も、他人の子となつた娘に対する違和感のようなものはなくなりかけていた。

しかし千幸の両親、森富夫妻に正々堂々と会おうという決心には至らなかつた。それが更に四年を遅らせ、きょう、わが娘との初対面を迎えることとなつたのだ。

落ち着かぬ心境の私は、千幸からの急なメールで更に困惑した。

〃秋葉原駅西口のCBXビル十二階まで来てくださ  
い。下りのエレベーターが故障したらしくて降りられな  
いみたいなのです。〃

困惑しながらも指定の場所に着くと、舶来趣味の展望室に、少々大柄の、女優というよりも運動選手のような若い女性が立っていた。私は彼女を見てひと目で千幸と判つた。

〃あつ、みつほさん。やつぱし想像してたとおりだ。〃

彼女は気取つた挨拶をするでもなく、嬉しそうな笑みを満面に浮かべ、朗らかな声で話しかけてきた。

私と千幸は、下りエレベーターが再び動きだすと、秋葉原駅地下街にある筑波急行の乗り場に向つた。

先月、私は千幸に、益子町へ行く予定があると知らせておいた。益子焼きで有名な陶芸の町の益子である。するとその時彼女は、仕事の邪魔でなければ一緒に行きたいといった。実は森富家のある鑑山は、宇都宮市の中心から益子へ向う県道の間中に位置し、千幸の父、英安氏も若い頃に住んでいたとかで、もう自分等の庭だということらしい。

因みに千幸は、地元で根ざした活動をするという意味で、鑑山葉子こてやまようこという芸名をつけている。自分自身であみ出した名だそうだ。しかしながら女優として一本立ちするのは容易であるう筈はなく、結構苦労事も多いと愚痴を零していたが、〃今度は歌をやるうかな。〃などと物怖じしない姿勢をみせている。

私が近頃千幸と意志疎通が楽になつたと感じたのは、互いの立場に共通項があるからと思ひ始めていた。私は静岡で一人暮らしをしてから、当初は詩の編纂や短編小説の執筆を少々手懸けたが、その後、歌の作詞に挑戦してみると、これが思わぬ好結果に繋がつた。流行歌とまではいれないが、十数曲世に送り出している。「ドリナ

の橋」「紅野の巡礼」「雨飾山麓冬だより」「斑鳩残照」、諸姉諸兄も聴いたことはないだろうか。全て作詞したのはこの私である。

一方、華々しく女優として船出した千幸も、その後は開店休業状態で、新たに歌で活路をみつけないと相談を受けたものだから、正直私も喜んで援助したいと告げた。しかしながら、先日渡した「青幻の章」（曲も私がつけた）は南の島に生きる抑圧された人の鎮魂歌ともいべきもので、若い女性が歌うには聊か陰鬱で不釣合いと思ひ反省した。

当の千幸は

「こういうのが歌いこなせて初めてプロっていえるんだよね。」

と極めて脳天気である。

益子行き話を伝えた時、開通したばかりの筑波急行を利用し、途中二度ローカル線乗り継ぐルートを薦めてくれたのも実は千幸だ。

「会って話するのは初めてだべ。私も落ち着いた雰囲気が欲しかったんだ。」

屈託のない喋りに時折現れる方言や訛り、それが私とこの子を隔てる距離なのかも知れない。

「で、みつほさん（千幸は私を電話でもそう呼ぶ）、

益子へ行くのも歌の題材をみつけに？」

「本当はね、歌はもう出来てるん。デモテープも持つてきてるから、あなたが気に入ったら歌ったらええてね。」

「そうなんだ。あとで聞かせてね。」

私が二十七歳のときやから、あなたが生まれるだいぶ前、益子町でひとりの女性陶芸家が蜂の毒で亡くなるという事故があったの。そのひとの息子さん、今でも名前覚えてるけど、池田拓さん、母の遺志ですからって早急に彼女の臓器提供を申し出たの。ドナー登録も黄色いカードも存在しなかった時代に、社会通念として、まだ市民権も得られていないのに毅然と意思表示してたのよね。

私が強烈な印象を感じたのは、テレビに出てた池田さんの姿が、どこか神様の光に照らされているように思えたから。いつか、お母さんの思い出話を聞いてみたいなあつてね。でもそんなに慌てて、マスコミが尋問するようにやる訳にはいかなでしよ。そしたら今度は時間が経ちすぎて了ったわけ。」

千幸は眼を円くしながらも黙って聞いていた。

池田さんかあ。陶芸村の終点の民宿やってる家かなあ。でも益子でひとつ、私も気になることがあったんだ。

他県ではあまり知られてないけど、益子は蜂蜜が名産品で有名だったんだ。陶芸村の観光客にも人気商品として結構売れてたみたい。それがここ数年蜂蜜が獲れなくなっちゃったんだって。地元では異常気象のせいだとか、働き蜂も嫌気が差して職場放棄したんだとか、いろいろ言ってるけど、詳しいことはよく判らないんだって。

今度は私が眼を白黒させるハメになった。

不思議なことって、あるのね。ギリシャ神話の、蜜蜂飼いの受けた罰みたいなこと、聞いたことない？ 蜜蜂飼いのアリストイオは、オルフェの恋人エウリュディケをびっくりさせるだけの積りが、結局は死なせてしまうことになるの。それで蜜蜂は全ていなくなってしまう。ギリシャ神話かあ。うちのスタッフがそういうの扱ってくれば、私の出番も、もつとありそうなのになあ。あつ、そうそう、みつほさん。それって関係ないと思うよ。池田さんだっけ、その人のお母さん、蜂の毒で亡くなったのなら、スズメ蜂か、大きくて危い蜂の筈だよ。同じ蜂でも蜜蜂と関連性云々を言いだしたら、こじつけだなんて思えちゃう。私的にはね。

頭を搔く仕草を見せた千幸の背の窓に筑波山が雄々しい稜影を映した。二輛編成の気動車は、乗り換え駅の下妻に間もなく着こうとしていた。ここで再びローカル線

に乗り換え、益子へと向うのだ。

ここで千幸の父親、森富英安氏について記しておく。まだ私が、死の淵から生還したばかりの頃、娘が貰われていった先の森富さんという人が競馬関係の人だと知って素直に安心したものだ。馬主か、牧場関連か、いずれにしても、私が育てることが出来なくなった娘の受入れ先としては申し分のない、裕福な家庭だと直感したからである。

だが、森富氏は競馬予想家として広くその名を知られた、その道のカリスマということであった。つまり私が無知すぎたということ。

嘗て公営競馬の全盛時代、森富氏は九州や関西へも出張し、その超人的な中率をもつて支持層をひろげ、現在でも各地に森富氏の弟子を自称する関係者が多くいるのだという。

私は千幸の両親と対面する度胸も持ちえなかったが、群衆の中に紛れ、英安氏に正体を明かされずに接近する機会を得たのだ。丁度そのころ、氏の異能ぶりによって公平さが保たれないということ、一部の競馬場で出入りが不許可になった記事を週刊誌でみつけた。見出しは確か

「南関東の連中は俺にコンセプト（考え方）をとられ

るのが、そんなに怖いのか。だつたように覺えている。

私はそれまで競馬に興味をもつこともなかつたが、こうして千幸の父親と遂に対面することになつたのである。

栃木県には小田林と佐野の二箇所で公営競馬が開催されていて、私は、その日の開催地、小山市の外れにある小田林競馬場を目指した。硝子張りのスタンドも大画面もない、ベンチが並んだ馬見所があるだけの殺風景な馬場である。

馬券売場に隣接して、二十人位の予想屋が、各自声を大にして買目狙い目を訴えていた。当日はグレードレースもなく、入場者も閑散としたものだったが、そのなかで一箇所、多勢の客人を集めたコーナーがあつた。

「ゴールイン」と掲示板をのせた、森富英安氏の主宰するコーナーである。

さて、みんなはどう思うか知らんけど、3番アーバンカウボーイ、6番ブラックウイドー、この逃げ馬二頭どちらか必ず失速する。騎手を見なさい。オンミツと井川だよ。9番マンハッタンフォグ、休養明けの良血だけどねえ……。

選挙演説顔負けの話術と説得力で、聴衆を皆とりこにしている様子であつた。

現在単勝35倍の8番ミツホズイグザグ、前走7着で新聞でも印が少ないようだけど、ラスト3ハロンを34秒8で走っている。佐野の良馬場でこんなタイム出した馬は僕は今まで一頭しか知らないよ。伝説の名馬キタカミポアロだよ。きょう、間違いなくニュースター誕生するね。

諸君！行つてこい、38万馬券は君たちのものだつ。

森富氏が「ミツホ、ミツホ」と連呼し、8番の馬を推奨していたものだから、千幸の父親であることも忘れ、レースに関心が移っていた。百円硬貨を出し、数字の記された小さな紙片を貰うと、素早く馬券を求め、競馬場を後にした。

私は千幸に「競馬場へ行く」と予め伝えておいた。その時も、自慢の父親のもとを私が訪ねるのがさも嬉しいという返事をくれていた。

一方英安氏のほうは、競馬場にて対面したこの私に、何やら直感したようで、その日の晩、千幸に「生き別れた姉さんでもいるのか。」と聞いたものらしい。

千幸は何も隠しだてせず、私の存在をも、すべて父親に話したという。そのときの英安氏は、決してびっくりすることもなく、落ち着いた、感慨深か気な表情をしていたそうだ。

「そうか、ミツホさんというのか。お前のほんとの

おつかさんだったんだな。〃

その森富英安氏もことしの一月に亡くなった。三月末をもって廃止が決まった栃木競馬を先導する結果となつて了つたのである。

私ね、本当はまだ実感が沸かないんだ。お父さん、何をするにも楽しそうだったし、今でも、どこからか出てきて面白いこと始めるんじゃないかって。だからつい私ひとりで騒いじゃう。おかしいべ。〃

列車の揺れが大きくなって、私が座席から転げそうになるのを見ると、千幸が口もとを押えて、ふつと笑つた。益子に到着する時刻だ。下車の準備に慌てた。千幸にとつても益子は幼い頃より家族で遊びに来たところ、とても気に入っているという。

お父さんのお葬式、初めはうちだけでやる積りだったの。私、独りっ子だし。でも組合とか新聞社とか電話が鳴りだすともう、凄いいことになっちゃった。結局は市内の倭成会ホールでやったけど、告別式になると六千人位の人が来てたんだって。岐阜県とか九州からも来た。森富さあん、万馬券を獲らせて貰つたよおっ……てね。私も貰い泣きしちゃったよ。お母さんと一緒に大勢の人を迎えて、「よかつたね。」って。変だべ、お葬式なのによかつたなんて。

でも私、その時やつぱり、お父さんは凄いなって思つた。それと私たちだけのお父さんじゃないんだってこともね。

私も、多くの人を楽しませるようにならないと……。〃

益子に到着し、私達の他にも大勢の行楽客を下ろすと、列車はブロロンと豪快な動音をたてると、終点の茂木へと走り去つた。町の中心へは一籽程歩くというこゝだが、閑散とした駅周辺の雰囲気には不釣合いな群衆はどうやら次の列車、汽罐車の牽引する名代列車がお目当てのようである。

駅と街とを結ぶ葛折りの道は行交う車も少なく、満開を迎えた桜の大き木が随所に、北関東の遅い春を歓喜し花曆に彩りを添えていた。

街に近づくと、農地を潰して造つたと思われる広大な駐車場に、それでも順番を待つて入場しようとして、車をなしていた。大型観光バスも十台程停つている。高速度路が付近まで達し、首都圏から便利になつたこともあって、この町も日帰り行楽地のひとつに組込まれたといふことなのだろう。交通整理員の慌しさが、いまこの町を象徴しているかのようだ。

漸く陶芸の土産物店の並ぶ町の中心へと辿り着いた。

近代化する街並とは逆に、どこまでも続く田園風景はきつと昔の儘なのだろう。咲き誇る蓮華草の薄紅色、いちめんの蓮華草畑となつて仄かな甘い香りを醸し出している。

さつきから千幸は草原の遠く向うの方に何やら気になるものでもあるらしく、少し遅れてはその度に速足で私を追い駆けてくるのだ。

益子の町へ来たといつても、私の陶器に関する知識など標準以下にすぎぬ。

もし仮に、無造作に並べられたいくつもの陶器のなかからひとつを選ぶとすれば、おそらく私は明るい彩色を用いた、例えば九谷焼のようなものを選ぶであろう。更には西日本の代表的な有田、伊万里、唐津、以前に説明を聞いたことがあるにも拘らず、この三つが見分けられない。そして益子焼に対して私が抱いていた印象は単色の、それも土色一色の余りに地味なものであった。著名な陶芸家の名も数人覚えていた程度だ。

千幸が自由時間といった三十分位、私は店を見て廻り、いちばん大きな建物で目立つからと指示された町立陶芸博物館の喫茶室にて先待ちすることにした。

さよう私が選んだのは「山水」と呼ばれ、単純な線で柳の葉や川、風を表す新しいタイプの益子焼のぐい呑みである。あとからやってきた千幸によると、この「山水」

をつくっているのは益子でも一軒だけだという。

「私はどうしても、これになっちゃうな。」

そういつて袋から取出したのは掌大の馬の埴輪だ。本などでよく目にするものよりも背が低く脚が短い。どこかダックスフントを連想させるユーモラスで可愛い馬である。

手ばやい仕草で袋に仕舞うと私に渡してくれた。

「これはおみやげ。私はあの店に非売品として置いてある大きな埴輪が欲しくてね、顔を売っておこうかなって。ひびが入って、さわっただけで毀れそうだけど、青磁みたいな色が出ててすごく綺麗なんでもん。」

だが千幸は埴輪店に寄っていただけではなく、先程気になった蓮華草畑まで戻って郷愁に浸っていたのだという。父と母に手をひかれ心ゆくまで遊んだ、幼い思い出を。

「うちのお父さんね、出身は芳賀町、勝道上人さんのお寺で有名なとこだよね。だけど、益子ですごした期間が長くて、「ふるさとはやっぱりここかな」、って言うってた。私もお母さんもこの町に来るのが大好きなんだ。でもさっきのみたいな、ピンクの絨毯みたいなお花畑を見るの、本当久しぶりだったんだ。」

博物館を囲む高台にも桜の原木が何本かあって満開の



花に陽光を浴びせていたが、その輝きも昼下がりを告げていた。私は今日の宿所をどこにしようか案じた。

千幸がいうように街並に沿って道をゆっくり下ってゆくと町の終わりに民宿池田屋がある。私が訪ねたい池田さん母子の家がそこであれば、今夜私は目的を達し、池田拓氏から母親の思い出話をきくことが出来るであろう。だがこの時私は、自分でも判り得ない或る種のためらいに悩まされていた。それが私の足どりを重くした。幼時の思い出がそうさせたのか、先程から千幸も神妙な面もちになつてゐる。仕方がない。父親と死別してまだ日も浅いのだ。

「ねえ、みつほさん。ひとつお願いがあるの。きょううちに来て、泊まつてほしいんだ。」

唐突だった。私はずつと千幸も含め森富家の人間とは会つてはならぬ身であると考えてきた。それはそうだろう。相手の立場にたてば、この子に精一杯の愛情を注ぎ、懸命に育ててきた彼らにとって、私などただ肉親というだけで娘を獲つて了う存在かも知れぬのだ。

あこやの森に棲む魔女の話をきいたことがある。その魔女は自らが娘を育てられぬため、村の婦人に吾が子を託した。一方、人の子として育てられた娘は魔女のもとに戻るなど思つてもいない。やがて二人の母は争うこと

となる。

千幸を育てた母、森富香苗さんからすれば、この私などあこやの森の魔女のようなものだろう。

「私だつてみつほさんのこと、ちゃんと理解してあげなきゃいけないって、分つてる積りなんだ。」

私に脱力感が残つた。必要以上に構えていたのは私の方だったのだ。そのせいで千幸が連絡をくれてからきょうまで四年を費す結果となつた。自らの不運を病気のせいにして、嫉みの炎を焙つている間、この子の両親は優しい人間愛で包んでくれていたのだ。

今こそ私は香苗さんに直接会つて、この子を立派に育ててくれたことに対し、礼を述べるべきではないのか。丁度人間と闘い、魔力をもつてしても人間の真心の前に敗れ去つたあこやの魔女のように。

「私、本当は不安だつたんだ。みつほさんに冷たくされたらどうしようって。何の不自由もなく暮らしてきたのに、不思議だよ。でも欲しいものが次つぎにできてくるのって、悪いことかなあ。」

あつ、ごめん。泣いちゃいけないね。みつほさんの服よごしちゃうとこだった。こんなだから、私、女優として大成できないんだ。」

大柄な千幸が見せた、初めてのあどけない姿だった。

私たちは益子を離れ、宇都宮市内行ききのバスで千幸の家のある鑑山へと向かう。空をすっきり茜色にした夕陽が、一面の野の花畑を際立たせている。地の果てまでも、蓮華草の畑は続いているかのようだ。

お父さん亡くなったの急だったでしょう。そのせいだろうけど、お母さん、この頃元氣ないんだ。「鉄道員」という古いイタリア映画のラストシーンみたいに、放心状態になつてるの。話し相手になつてくれないかなあつて、ずっと思つてた。

そうだそうだ、もひとつ、みつほさんに質問があつたんだ。あのアリス……何だつけ、ギリシャ神話の続き。

〃蜜蜂飼いのアリスティオでしょう。〃

〃そう、それ。いなくなつた蜜蜂がどうやって帰ってくるのかなあつて話。〃

〃それなら、アリスティオは神から託宣をうけて、生贄となつた牛の体内から蜜蜂を発見するわけだけだ。〃

〃そうなんだ。なんだかキモいなあ。牛の死体じゃあ。私、この町を舞台にした話をつくろうって考えたんだけどなあ。もと通りに蜂蜜がいっぱいとれるようになる、そんな物語だけでもつてね。〃

いたずらっぽい眸が輝いた。家路について、明朗な千幸に戻つてくれたようである。

〃そうだよ。デモテープ、聞かせて。〃

思い出したように大声をあげた。

前回の曲「青幻の章」が陰鬱な印象を与える、との反省から今回は軽快なリズムにのせた感傷的な旋律を基調として、亡き母を思い慕う歌詞と釣合うよう努めた。

暫くヘッドホンをあてて聞いていた千幸も氣に入つたとみえて、

〃ピアノ弾き語りだと、コーラス部分が単調にならないかなあ。〃

〃ヴォカリーズ唱法つていうの、古旋律っぽく歌わないと雰囲気出ないよね。〃

〃この歌は池田さん親子のことをイメージしてつくつたんでしょ。私も今はお母さんと二人だけになつちやつたから、お母さんに聞いて貰う積りで歌おうと思ふんだ。ほんとこの頃元氣ないんだもん。ありがとね、みつほさん。〃

バスは鑑山に到着した。宇都宮の市街地と変わらぬ、家々が密集しているところのようだ。

千幸はこれから出勤の仕度にかかるとみえ、態度も急にせわしくなつていた。

〃あら、どうも。〃

現れたのは香苗さんだ。顔色もすぐれず窶れた表情で、すぐ引つ込んで了つた。矢張り私と会いたくなかつたの

だろうか。

すると奥の方から千幸の大声が聞こえた。

「モー、お母さんたら、苺全部だめよ。ちゃんとやってよね。アーア、こりゃジャムにするっきゃないな。」

森富家では数年前から小さな温室を借りて苺の栽培をしており、比較的時間に余裕のある香苗がおもに携わることになったが、千幸の話ではしょっちゅう摘み忘れをするらしく、母親の作業を手伝うのが世話がやける、自分でやったほうが早いといっていた。

「みつほさん、ごめん、私、帰りは夜の一時位になるから。水商売っていつても、男っぽい服着てカクテルシェーカー振ってるわけだし、映画製作事務所のあるビルのおーナーが店でマスターやってるわけ。今、町全体でカクテルを盛んにしようってね。宇都宮は餃子だけじゃないんだよ。」

悪いんだけど、私がない間、ガスとかお風呂のお湯とか、お母さんが危なかったら、みててくれない。もう、ほんと、困っちゃうよ。」

私には愛らしい笑顔で話してくれるのに、自分の親には高圧的に振舞う。夫を亡くして日も浅い香苗さんの胸のうちを思うと、聊か心配になったが、現代の若者は総じて対等もしくは勢いをもってして親と接するのかも知れない。千幸はいまの香苗さんにとって、生きるべき光

明の筈なのだ。

暫くして香苗さんが、家が狭いので自分の寝室に私の布団を用意したと、照れた表情で告げに来た。二階は千幸がずっと使っていた子ども部屋で、いまは物置き代わりになっているらしく、千幸は父の部屋に移り、暇をみて遺品の整理をしているという。もはや何の役にも立たぬ過去の競馬に関する資料も半端な量ではなく、大半は廃棄することになるだろうと言っていた。

「あの子、小さい頃からお父さん子で、喋り方まで似ちゃったんですよ。血は繋がってなくても、性格は似てるんですよ。」

私ね、主人を亡くしたあとも、自分では大丈夫だと思ってたの。だって主人の生き写しのような娘が一緒なわけでしょう。でもこの頃私だけひとり、とり残されたっていう気持ちがあるの。主人の言葉を借りると殿敗しんぱいけということね。」

私を家に呼ぶ話も、香苗さんが提案し千幸が納得したものらしい。何も隠しだてせず、私のことを「坂井のお母さん」と呼び、千幸が幼い頃から、いずれは会わなくてはいけないと論じておいてくれたのだ。奔放そうな反面、千幸の実直な性格は、香苗さんに依るところが多いのだろう。私も感謝せねばなるまい。

「本当はね、昨日あの子と喧嘩したの。」

原因は「私」にあったということか。香苗さんが千幸に、これから先、自分にも何があるか判らないから、坂井のお母さんと仲良くするのよ、と言ったらしい。千幸は、そんなのひどいと言って泣き喚いた。泣くことも怒ることも滅多にしなかつた娘は、母親の弱気を徹底的に詰ったという。香苗さんは続けた。

「悪いのは私、どうかしていたわ。言っちゃいけないことだものね。どうしてあの子の気持ちも、素直になつて汲んでやれないのかって。」

あの子、将来結婚するときはお婿さん連れてくるねって、お母さんも一緒なんだよって言ってくれたのに。

私、娘に気苦労ばかりかけてる駄目な母親なんだわ、きつと。」

(それは違う。香苗さん。)

私は、咄嗟に出そうになつた言葉を喉もとに戻した。千幸が結婚しても母親と同居したいと思うのは決して気がねからなんかではない。自分の生きるところにはいつもお母さんがいる、それは大人になつても同じこと、一緒に暮らしたいと願うのは、甘え上手なあの子の率直な思ひからなのだ。

千幸の心のうちは即座に察知できた。だがこのことは香苗さんに伝えずともよいだろう。その必要もない。

布団を被つた香苗さんの吸り泣きだけが暫く聞こえていたが、やがて私たちは知らぬ間に深い眠りに落ちた。

すがすがしい朝の陽光を顔に受け、私は耳に届く幸せな親子の会話で目覚めることができた。千幸は深夜まで仕事に出ていたというのに、もう笑顔で食卓についている。ご自慢のカクテル風サワーは近頃覚えたゴールドンスティックのアレンジで、国内ではあまり普及していないが、元来カクテルは昼下がりの時刻に色あいを楽しむ類いのものだそうで、グラスを覗いてみると、琥珀色に溶けた小泡に吸い込まれそうな位だ。

市で主宰するカクテルコンクールでは上位入賞を果たしたいと言っている。

「そうだそうだ、みつほさん、静岡の苺、「章姫」っていうんだっけ、甘くておいしいんですよ。暖かい光を浴びてるから。今、お母さんと話してたところなんだ。」  
「章姫は少し固いの。静岡にも「栃乙女」とか来てるから判るけど、苺って寒いところの方が甘くなるみたい。その証拠に山形の「光えくぼ」、あれはおいしかった。さくらんぼより甘くって。」

「そうなんだ。今度、植えてみようよ、お母さん。」  
千幸が突然、昨日渡した「蓮華草のバガテル」のデモテープを流した。

綺麗な歌だべ。この歌はもう、私たちだけのものじゃないんだよ。私が生まれるずっと前に、お母さんを亡くした益子の池田さんという人の思いが詰まっているんだし、昨日はあいにく、池田さんには会えなかったけど、この歌が広く栃木県中に響くように、私が頑張るって、みつほさんと約束したんだから。

私もあとのことは千幸に託そうと思う。

二人に見送られて、私はバス停に向った。親子は時折顔を見合わせて仲睦まじい様子を見せている。香苗さんにも少しばかり明るさが戻ってきたように感じられたのが何より私には嬉しかった。

ねえ、みつほさん、誕生日いつ？

千幸が眼を丸くしてきいた。

私、星座占い、得意なんだけど、みつほさんて牡牛座じゃない？

えっ、どうして判ったの。

やっぱりだ、やっぱりだ。

私の誕生日は昭和三十年五月十六日、女優のデボラ・ヴィンガーと同じなのが唯ひとつの自慢なんよ。

生まれは兵庫県で、アメリカのオハイオ州でないのが残念やけど。

じゃ、生まれた時間、覚えてる？

たしか、午前七時前だっ。

それじゃ、やっぱり「お早う」だべ。これには香苗さんも吹出しそうな笑いを懐えきれず、大声を發した。もう大丈夫だ。香苗さんも、大丈夫だ。それからというものが、万事は嬉しい誤算つづきのようだ。

ひと月後、私の誕生日の頃に、千幸は香苗さんと共に静岡に来たいと言っていたが、それはどうやらお流れになりそうな気配だ。

それは千幸にとっては五年ぶり、女優として映画の主役となる機会を得たからだ。それも世界最高記録を出すマラソンランナーの役で。

いまは現地ロケの真つ最中で、半月程フランスのアビニオン市郊外に滞在している筈である。

母親と一緒に、父英安氏の辿った全国旅行に出たいという夢も、少し先延ばしになるだろう。

ソロリサイトをやりたいというのも、慌てずに進めてゆけばいいのである。

所詮今の私じゃ、浅キョンに比肩するなんて無理だよ。

一年前は自嘲気味にメールをよこした千幸だが、これからは一気に飛躍するのもかも知れない。大柄で声も太く、頼もしい印象が若い女の子達の憧憬を得ているのだ。

と、蟲貞眼も含めて、私は感じた。

最後に私が千幸に渡したデモテープの歌は、

うらかな春の陽射しのなかで

桜と桃はおたがいに

匂い立つ花を寄せ合いながら

遅い春を楽しんでいます

茜さす地平線の遙か向こうまで

いちめんの蓮華草、野原はつづきます

ほのかに見とれる私をよそに

母さん、あなたの掌から

土の仔馬が旅立ってゆきました

いま思うと旅立つ前に

尋ねておくべきだったのですね

どこまで駆けてゆくのですかと

母さん、蜜蜂たちはどうしたのでしょうか

いつもなら蓮華草の畑のなかで

せつせと蜜を集めているのに

汗ばんだ私の二の腕にとまり

ちよんと鼻づらを寄せてくる

可憐な羽音が好きでした。

母さん、あなたは蜂の毒に斃れました

けれど母さん、あなたの遺志は生きつづけます

私もきょう旅立ちます

新しい命が生まれくるのを見とどけるために

土の匂いと野州の風と

母さん、あなたの掌のぬくもりをしのばせ

あらたに命が生まれくるのを

紙面では歌詞だけを紹介しておこう。興味ありとあらば私に請わりたい。試聴して頂きたい気持はいつもあります。気に入って頂けるものと自負しつつ――。

⑨ バガテルとは

クラシック音楽で用いられた小曲の名称のひとつで、形式的に特別の定義はない。有名な「エリーゼの為に」はベートーベン作曲のバガテル。